

不登校の支援ガイド

武豊町役場 学校教育課



不登校とは（文部科学省による定義から）

何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者
（病気や経済的な理由による者を除く）

不登校についての捉え方

不登校は

- 取り巻く環境によって誰にでも起こり得る
- 多様な要因・背景により、不登校状態になる
- 問題行動ではない
- 不登校になったこどもが悪いのではない

[文部科学省 小・中学校学習指導要領解説 総則編]



<必要な休みなのかもしれません>

同じ病気でも、人により、また、その時の体調により症状が違うことで説明が難しいように、置かれた状況が同じでも、受け止めて登校できるこどももいれば、受け止め方が違い学校を休むこどももいます。そして、心身の変化を「何となく」「とりあえず」とうまく表現できないことがあります。

そのため、上手に説明できないとしても、お子さんの様子がおかしいのであれば、必要な休みなのかもしれないと捉え学校を休ませることは当然のことです。

不登校児童・生徒に対しては

- 個々の状況に応じた必要な支援を行う
- 登校という結果のみを目標にしない
- 児童・生徒や保護者の意思を尊重する
- 自ら進路を主体的に捉えて、社会的自立を目指す

[文部科学省 小・中学校学習指導要領解説 総則編]



<保護者だけが悩むことではありません>

学校や教育委員会は、学校に通えなくなったこどもについて、保護者の気持ちに寄り添い、一緒に考え支援していきます。また、社会の変化やこどもたちを取り巻く状況に応じて支援体制を整えていきます。

不登校はもちろん、その他の子育ての悩みについても相談できる場所[※]があります。そこでは悩みを共有し、支え合えるつながりをもつことができます。

※ 不登校相談や支援（学校・支援機関）一覧参照



不登校との向き合い方

1 家庭はいつも通り

学校を休んだこどもは、休む理由をうまく表現できないもどかしさや周りの人に迷惑をかけているという後ろめたさ、そもそも休んだという行為から自分を責めるなど、色々な気持ちをもっています。

そのような状態で、こどもの休みが続いたとしても、保護者が不安や動揺を見せないようにすることで、休んでも大丈夫だよと安心感をもたせることもできます。

そのためには、保護者がいつも通りの生活を続けてみることも一つの方法です。

そして、こどもを見守り支え続けるために、保護者自身が「少し休憩」「ちょっと気分転換」「誰かと相談」して、心身の健康を保つことが大切です。

2 こどもの居場所を整える

こどもにとって家庭は、最も安心できる居場所です。家族とのコミュニケーション、睡眠、食事などいつもと変わらない環境を整えることが、こどもの心の安定につながっていきます。

こどもがホッとすることができて、心身を休ませられることが大切です。

そもそも休みには、また家から一歩を踏み出すエネルギーを蓄えるためのもの、自分自身を整えるものという目的があることを心にとめておきます。

3 こどもとの関わりは

こどもは、休んでいる理由をうまく表現できないことがあります。話してくれた理由が、主となる要因でないかもしれません。

休んだことの本当の理由は、いつか見えてくるものです。はじめから理由を追究することは避け、理由にこだわり過ぎないような態度が必要です。

また休む中で、こどもが安心して、少しずつ本音を語り始める時に備えて、日頃から何気ない会話を大切に、こどもの変化を見守ります。

4 保護者だけで抱えない

こどもが家から出られないと、保護者も心配になります。ましてや、こどもの休みが続くことによる悩みは計り知れません。

そして、こどもに関わる問題は家庭のことと捉え、なかなか人に話したくないものです。

まずは担任や学年主任の先生、養護教諭など保護者が話しやすい学校の先生に相談をしてください。

また、スクールカウンセラーは心理の専門家です。保護者からの相談を受けます。

さらに武豊町では、「教育支援センター（たけとよステップ）」にいる「教育相談員」が、不登校等の相談事業を行っています。

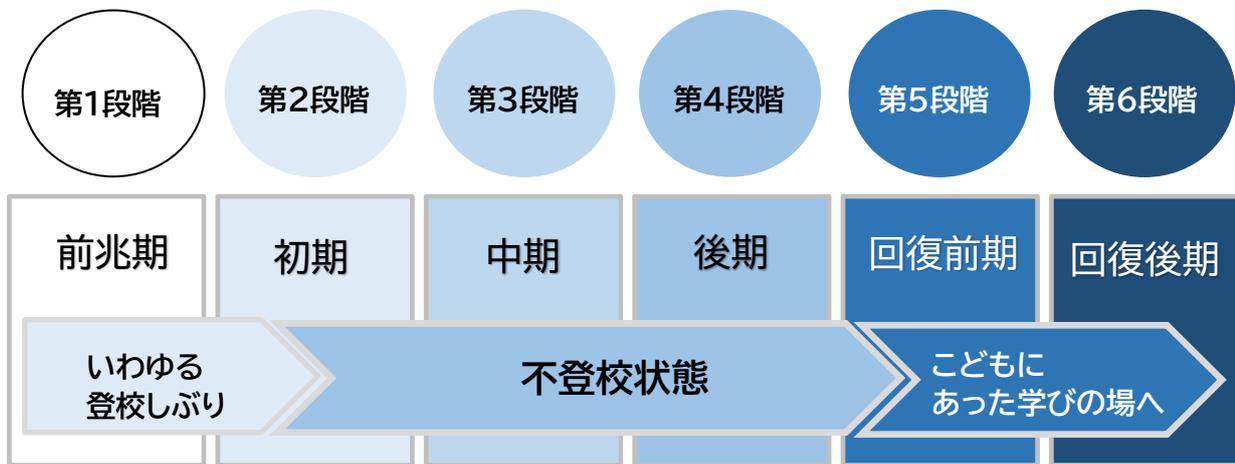
行きたくないそぶりを見せても、保護者の後押しで学校に行けたり、学校に行けばいつもと変わらない様子であったりもします。そして、明確な理由がなく学校に行けなくなったりと様態を捉えづらい、いわゆる登校しぶりから不登校になることもあります。

いつの日にかまた一歩を踏み出すまでの状態を本町では6つの段階に分けて支援していきます。

こどもの状態に応じて、保護者が支援していくためにどのように行動していくか考えていきます。

なお、こどもの状態の表し方については様々なものがあり、6つの段階の分類や名称等は、相談する際の便宜上のものとなります。

【こどもの状態と6つの段階】



第1段階 前兆期

- 朝、起きられない、起きない
- 忘れ物が増える
- 保健室によく行く など

登校をしぶることもありますが、保護者の後押しで学校に行ける場合もあります。いつもと違う様子と感じたら、学校での生活にも変化があるかも知れません。こどもの不安な気持ちやしんどさに共感し、こどものあるがままを受け入れてあげます。まずは学校に相談して、こどもの状態や心配な気持ちを先生やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと共有してください。

第2段階 初期

- 頭痛や腹痛などを訴える
- 食欲がなくイライラしている
- 寝つきが悪い など

登校をしぶることが多くなり、学校に行けない時も見られるようになります。ありのままを見守り、こどもが話をする際は、否定せずに聞いてください。気持ちを受けとめ、こどもが安心できる環境をつくれます。2日、3日と連続して休む時は、学校と相談を進めるとともに、学校以外の関係機関[※]への相談もご検討ください。

※ 不登校相談や支援（学校・支援機関）一覧参照

第3段階 中期

- 話をしたがらない
- 部屋あるいは家から出ない
- 友達と距離をおく など

休みが続き、累計が年間30日以上となっていくます。主となる要因によるこどもへの影響が大きい場合や複数の要因が重なる場合は、この中期と捉えられる期間が長くなることがあります。

この時期に、こどものためにとの思いから、保護者のとる行動が、こどもに無理をさせてしまうことにつながる場合があります。「休む」時期は、こどもの「エネルギー充電」にとって不可欠です。そっと見守ることが回復への土台につながります。こどもとどのように関わり支えていくのか相談機関等[※]にご相談ください。一緒に考え行動していきます。

※ 不登校相談や支援（学校・支援機関）一覧参照

第4段階 後期

- 外に出ようとする
- 友達を受け入れられるようになる など

わずかではありますが、こどもが自ら変化しようとする様子が見られるようになります。会話の中から興味、好奇心を引き出し、小さなきっかけを上手に与えます。こどもの自発的な思いをくみ取り、見守る大人たちと共に支援していくことが大切です。

第5段階 回復前期

- 勉強しようとする
- やりたいことを口にする
- 家族以外の人と話せる など

こどもが自ら行動を起こし始めます。やりたいことはできるだけさせてあげて失敗しても受けとめます。思うように行かないと周りを責めたりすることもあります。周りに気を使い無理をしている状態が見極め、無理をさせず、以前の状態に戻らないように支援します。

第6段階 回復後期

- 学習の場へ行ける
- 先生などの大人と話せる
- 自分で決められる など

こどもが居場所を見付け、学校や自分で決めた学びの場へ行けるようになります。本人のペースで進んで行けるように背中をそっと押す気持ちでサポートを意識します。社会的自立を目標とした教育活動へ本格的に戻る準備がいよいよ進められる時です。これまでの変化を肯定的に成長と捉え、応援します。

参考文献：東京都目黒区不登校支援ガイド

【不登校の支援ガイドについての問合せ先】

学校教育課 TEL:0569-72-1111

